アンデス山脈の中の小さな村で

秦　茂

思い出は１２年の昔にさかのぼる。その頃私は、アンデス山脈の中の小さな村にテントを張って生活していた。それは１９６６年１１月１２日に南アメリカをななめに横切る皆既日食があり、アレキパ（ペルー第二の都市）に近いアンデスの山の中には、カナダ、フランス、アメリカ、スイスからの日食観測団、それに日本からは斉藤教授（観測団長）、日江井、平山、私の４人がこのペルー日食に参加していた。観測地チグアタ村は、人口１０００人位、アレキパから車で５０分程の山ふところにあり、夕方６時、日が沈むころになると私一人をテントに残して、後の三人はアレキパのペンションに帰って行く。

第一の難関は言葉の問題である。村の大部分の人達はインディオで、この部落では独特のケチュア語が使われている。ペルーの正式な国語はスペイン語だが、どうせ分からないなら、スペイン語もケチュア語も同じことと、覚悟をきめてテント生活を始めた。

日食が終わって、天文学会誌に次のような記事が載ったことがある。「さて、この国には泥棒が多いというので、警官に昼夜張り番をしてもらったわけだが、寒い夜など秦さんは彼らにペルーの焼酎ピスコを飲ましてやる。もちろん自分でも飲んで、スペイン語とも英語とも日本語ともつかぬ言葉で彼らと語るらしいのだが、それが非常に良く通じるらしいのである。失礼な話だが、秦さんは我々同様スペイン語をあまり良く知らない。警官はむろんのこと村人達は英語も日本語も丸きり知らない。しかるに（中略）我々が無事日食観測を終わって村を引き揚げる段になって、一人の警官が秦さんと別れるのはつらいと言って男泣きに泣き出した。これを見て、みんなで警官に泣かされるとか、女を泣かしたということは聞くけれど、警官を泣かした人は初めてだろうといって感心したしだいである」

こうした学会誌が天文学会員以外にどの程度ポピュレートしているかよくは分からないけれど、あまり面識のない人たちから、”警官を泣かせた秦さんですか”と半年位は聞かれて閉口したものである。

夕方六時に他の三人がアレキパのペンションに帰ってしまうと、前にも書いたように私はたつた一人で観測器械の近くのテントに寝泊まりしていたわけだから、夕食をすませてしまうと、殆ど作業も出来ない暗がりの中に一人でポツンとおか

れることになる。人口千人の小さな村ではあるが、二軒程の雑貨店がある。生活必需品はそこで何でも扱っている小さな店で、セルベッサー（スペイン語でビールのこと）も扱っている。ここでのビールの飲み方は一寸変わっている。たとえば私がビールを一本注文する。マスターはコップ一つとビールを私に渡すのだが、大ていは村の若い人達がその場に居合わせて、自分で一杯にしたコップをのみほすと、となりに居る全く知らない誰かに、ビールとコップを手渡すことになる。そして次から次へとビールビンとコップが手渡されて大ていは空になって私のところに戻って来る。非番の時はくだんの警官氏もそのグループに加わるわけである。

勿論ビールが空になると、次の誰かがビールとコツプを注文して、またまた回しのみが始まるという仕きたりになっているようである。ビールが回って来る間は、しゃべっているか、つまみ物をたべるわけであるが、ビールの回り方が早い時は、おつまみなしで、グイグイとビールをあおっている。

ペルーの首都リマでは、ピルゼン・カヤオとか、クリスタルなどのブランドのビールをよく飲んだが、アンデス風のビールの飲み方にはお目にかかれなかった。

最近仲よくなった二人のペルビアン（ペルー人）と、アンデスの山の中の話を初めて、それも冷のコップ酒でまね事を始めたのだけれども、一番初めに私が目を回してしまった。やはりあの飲み方はアンデスの山の中に限る。

”サッポロ”１９７８年　１月号

最近お合いしたペルビアンとは東京天文台に太陽観測の研修の為、来日された方々であり、天文学会誌の一文の筆者は太陽物理学研究系主幹の平山　淳氏である。

よく知られている様に１９９３年には５月２１日と１１月１３日に二回の部分食があるだけで、次に太陽コロナにお目にかかれるのは、１９９４年の１１月３日である。この皆既帯は南米大陸のペルー、ボリビア、パラグァイ、ブラジルを通過する。一般の日食マニアの間では、１９９１年のハワイ、メキシコ日食の次の日食として計画されているようである。今のところ晴天率はペルーが一番よいとされているが、国内事情はあまり良いとは言えない。フジモリ大統領の手腕に期待するばかりである。

１９６６日食については、４年前の”日食情報”１９８８　ＮＯ．１に思い出の日食遠征として、すでに書いてしまっているが、この時点で参考にしようと思っていた、前記”サッポロ”誌が見当たらなかったのが、ごく最近ふとした事で入手できたので、追加させていただいた。

ペルーに行かれる計画をお持ちの方に知っておいていただきたいのは、先の警官氏をふくめてペルー在住の日本人もペルーの人達も私がお合いした限りでは皆いい人達ばかりだった。１９９４年１１月の日食には私はペルーに行きたい。

私のペルーへの思いにも拘らず、現時点では政府は各旅行社に対してペルーへの旅行を自粛する様に通達しているとの事である。